

連続コラム

— 光秀の源流を探る —

第4回 土岐明智氏から妻木氏へ

戦国時代の土岐明智氏は、父子兄弟が相争う内紛を繰り返して嫡流が移り変わり、妻木郷は最終的に妻木氏へと受け継がれます。その背景には何があったのか、内紛の歴史をたどってみましょう。

在京宗家から実力で妻木郷を奪った在郷分家の頼尚は、次に嫡子頼典との間で争いを起こします。この背景には守護家・守護代家・小守護代家が絡み合う美濃国内の複雑な政治情勢があったと考えられます。結果として、文亀2年（1502）に頼尚は頼典を義絶し、明智氏の家督は頼典の弟広美へと受け継がれました。

家督を受け継いだ広美は、没落した宗家に代わって幕府からも認められ、奉公衆に列します。ただし、在京して将軍に近侍することはとはやなく、妻木郷の維持に注力し、不安定な美濃国内の政治情勢を見定め巧みに身を処していきました。

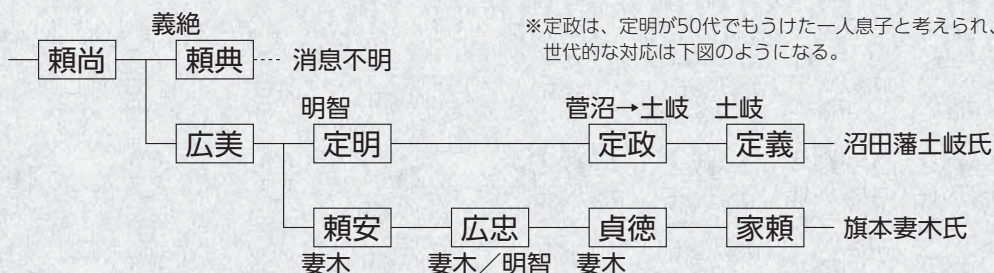
しかし、広美もまた嫡子定明との間に争

いを生じさせます。この争いは、守護土岐頼芸に近侍して忠節を誓う定明に対し、広美ともう一人の息子である頼安が、国盗りを謀る斎藤道三に味方したために生じた争いでした。広美はほどなくして亡くなるものの、父の遺志を継いだ頼安は妻木郷を押さえ、妻木を名乗って兄と対峙しました。こうして明智氏と妻木氏は分裂することになったのです。

天文10年（1541）頃から始まったこの争いは、天文21年（1552）の定明戦死で決着を迎えます。定明の幼い一人息子定政は母の実家に逃れ、叔父菅沼定仙の養子となったため明智氏は断絶しました。後に定政は土岐に復姓、最後まで明智を名乗ることはありませんでした。

結果、頼安の妻木氏が実質的に明智氏宗家となりました。頼安の嫡子広忠は再び明智を名乗り、一族の長老かつ伯父として、光秀を支えていくことになります。

【土岐明智氏から妻木氏へ：略系図】



土岐市美濃陶磁歴史館特別展

『光秀の源流～土岐明智氏と妻木氏』

講演会開催のお知らせ

【講演1】「崇禅寺の位牌に見る明智氏と妻木氏」 黒田正直氏（土岐市文化財審議会会長）

【講演2】「明智光秀と妻木一族」 土山公仁氏（愛知淑徳大学非常勤講師）

日時 令和2年8月29日（土）午後1時半～4時（開場：12時半）

場所 土岐市文化プラザ サンホール（土岐市土岐津町2121-1 土岐市役所隣）

申込 事前申し込み不要

妻木八幡神社棟札
（土岐市指定文化財）
広美と頼安の棟札
天文10（1541）年

